

西行の出家と歌

出 原 博 明

(1)

西行が23歳の若さで出家遁世したことの動機については、諸説あるが、やはり、なお謎を残している。この小論の目的は、その問題と西行の歌との関係について考えてみることである。

西行は、1118年（永久6）に生まれて、1190年（文治6）の2月に73歳で寂しているが、これは、将に動乱の時代であった。この時代には、保元の乱、平治の乱、源平の合戦と平家の滅亡、などが起きており、その他にもあっちこっちで様々な争乱が勃発している。飢饉や疫病の蔓延ということもあった。西行が出家したのは1140年（保延6）であったから、上記の三つの大事件よりも前ではあったのだが、当然のことながら、出家以前に既に、これらの大事件に繋がる予兆ともいえる出来事は数多く見られていたのである。それに、西行は、保元の乱や平治の乱の当事者たちと浅からぬ関係にあった。

先ず、出家前の西行即ち佐藤義清は、平清盛と同期の北面の武士であった。この役は、宮廷の警護に当たることを任務とする兵衛尉であり、戦時中の近衛兵のようなものであった。その前には、彼は、時の帝鳥羽上皇の高級官僚である徳大寺家に仕える家人であった。また佐藤家は紀州の田仲荘の預り所でもあった。これはその所領を徳大寺家に寄進することによって獲得した

立場でもある。つまり、所領を権勢の大きな者に寄進することによってその保護を受けて預り所としてそれを管理して収益を得るというシステムを利用していたのである。西行について、藤原頼長の『台記』に「家富み」と記されているのは、¹⁾この荘園からの収入を踏まえてのこととされている。ちなみに、義清が兵衛尉という職を獲るために必要だった朝廷への莫大な貢ぎ物の献上ということを佐藤家がクリアし得たのもこれ故に可能だったのである。然し、この時代は荘園領土をめぐる紛争が絶えず、佐藤家所轄の田仲荘も高野山との境界争いの種になっていた。この時代は全国的に所領問題を統御すべき立場にある國司の対処にも不明朗なものが多く、あっちこっちで血なまぐさい事件を起こしながら、荘園所有者（在地領主）たちの不満が鬱積してゆく状態にあった。（こういう状態が、後の武士階級の勢力の増大と平家による支配、それに続く東国武士勢力の覇権の確立、という歴史の流れへの主要な原因の一つにもなったのである。）そして、田仲荘の所轄者としても、この状況を身を以て経験する立場に義清はいたのである。その上、遠縁に当たる平泉の藤原一族の一人黒菱紋の騎士速見三郎が遙々彼を訪ねて来て、現体制に対する謀反挙兵に加わるように要請するという一幕もあった。このような中で、鋭敏な義清が、迫ってくる時代の暗雲を察知しない筈はあるまい。

ところで、宮中勤務に於ける義清は、文武両道に抜群の才能を発揮している。弓馬の術と剣の道に勝れ、蹴鞠と和歌に秀でていた。そもそも義清の父方の家系は、有能な人材を輩出してきた武門である。祖先を、奥州平泉の藤原一族と共有し、俵藤太藤原秀郷の流れを汲む。他方母方の系譜については祖父以外のことは分かっていない。だが、その祖父は、なかなかの粋人で、遊芸に優れた、当代の名士の一人だったようである。目崎徳衛の『西行』によれば、この祖父監物源清経の名は、後白河院の自伝『梁塵秘抄口伝集』、源師時の日記『長秋記』、藤原頼輔の『蹴鞠口伝集』、のなかに出ているという²⁾。それらの記述から判っているのは、彼が今様の名手であり、心優しい人柄であったこと、遊里の内情に通じていて遊興にふけるを好んだこと、蹴

西行の出家と歌

鞠が上手であったこと、などである。これらのことから判断すると、文武両道に優秀であった義清は、武人としての才能を父方から、和歌と遊芸の才能を母方から、それぞれ受け継いでいたといえよう。西行が、崇徳院をはじめ不遇となった人たちに対してとった行動を考えると、彼は、清経の心根の優しさをも継いでいたのであろう。

このようなエリートの青年武士義清は、当然、宮中でも人々の耳目を惹き付けられないわけにはいかなかっただろう。それに、彼は、自分の主君である鳥羽院の寵愛をも受けていた。これは、単なる主従の間の愛情にとどまらず、時代背景からいっても、寵童のそれであったようである。(院は、左大臣徳大寺実能と北面武士義清だけを伴って、普請中の安楽寿院を夜陰にまぎれてお忍びで見回わってもいる。これは、義清の身分を考えれば、破格のことであろう。西行には、この時のことをなつかしんだ「今宵こそ思ひ知らるれ浅からぬ君に契りのある身なりけり」³⁾という歌もある。)

確かに、宮中での義清の前途は洋々として見える。兵衛尉のなかでは明らかに何かにつけて恵まれた立場にいる。しかし、それは、どのような視点から見るかによって違って来る。

例えば、義清は青年武士としては格別の処遇を受けてはいるが、当時の体制全体の中での武士そのものの地位はどうであったか。義清も抜擢されて就いていた北面の武士というポストにしても、それは兵衛尉のなかのエリートにはちがいないが、その役目は、帝の居所の北面の警護、いってみれば番犬の仕事ともいえよう。武士階級は、貴族公家の遙か下の地位に置かれ、昇殿さえも許されなかった。尤も、これは、後に許されることになるが、それは、平清盛の父平忠盛の長年にわたる涙ぐましい努力の結果、やっと獲得できたのである。忠盛は、白川法王の女であった祇園女御を押しつけられるままに妻として譲り受けもし、瀬戸内海 of 海賊を平定したり反乱を鎮圧したりして数々の勲功を立てたが、おいそれとはなかなか報いられなかったようである。評定に於いて彼の昇殿に反対する公卿が何人かいたのである。彼は、鳥羽院に得長寿院千躰観音堂を建立寄進することによって、やっと刑部郷に

昇進して昇殿を許してもらえるようになったとされている。忠盛の出世への意欲にはすぎましいところがあるが、このように苦心して父親が開いてくれた突破口から突き進んでゆけるという立場にいたから、清盛は、世俗的な出世競争に於いては、義清より何歩か先を行っていたのである。もちろん、清盛は、このより恵まれた立場だけではなく、後に明らかになったとおり、武人としても政治家としても抜群に勝れた資質と能力を備えていた。これに対して、もうひとりの格別に優秀な人材であった義清のほうは、早くに父親を亡くしていた。生前の父親は、一介の兵衛尉であり、特に際だった勲功を立てたという記録もない。義清は、ゼロからの出発であり、兵衛尉の職に就くためにも、多大の寄進をしなければならなかった。同じく北面の武士に抜擢されたといっても、やはり、清盛のほうが遙かに有利な立場にいた、ということとは否めない。

義清は、確かに鳥羽院の寵愛は受けていた。しかし、白洲正子も指摘しているようにそれが寵童という側面をも含む性質のものであったなら、その持続に必要な愛される側の若さというものは、すぐに儂く衰微してしまうものである。彼が出家を決意した23歳という年齢は、折に触れてそういう近い将来のイメージが心をよぎってもおかしくはない時期ではないだろうか。それに、仮に寵童という要素がなかったとしても、スウィフトも指摘しているように、権力者とは極めて気まぐれなものであり、権力者の寵愛などというものは、風の吹きようで、いつ消えるかもしれないものだ。鋭敏な義清が、その無常を意識しないはずはあるまい。

無常といえば、義清は、出家の少し前に、身近に、それを具体的に示す衝撃的な事件を経験している。即ち、彼の2歳上の従兄佐藤憲康の突然死である。既に言及したとおり、彼らの一族とルーツを同じくする奥州藤原一門の越後頸城荘領主氷見三郎が体制に反旗をひるがえして蜂起するに際してそれに呼応するように彼らに要請してきていたが、憲康はこれに従おうとしていた。他方、義清のほうは、応じないという姿勢を取っていた。或る朝、出仕の途中、義清が憲康の屋敷にさしかかると人々が集まって慌ただしく動いて

西行の出家と歌

いる。訊いてみれば、憲康が、昨夜、突然亡くなった、とのことであった。

もちろん、それまでにも、義清は、無常を教える出来事を幾つも見聞していたであろう。然し、不意に身近な肉親がそれを体現するのを目の当たりにしたことは、深刻さに於いてもそれらとは質的に異なる衝撃を与えずにはおこななかったであろう。

闇の中に不穏な気配の潜んでいる時代、自己の将来への不安、身近な肉親の突然死という体験をとおしての無常への認識、これらのものが繋がり合って、義清を追いつめようとする。このような状況のなかで、明敏な義清が何らかの活路を見出だそうとするのは自然の理であろう。

ところで、この時代、出家遁世という行為は珍しいことではなかった。むしろ、流行といっても過言でないほどに、出家者が輩出している。例えば、義清の歌の師藤原為忠には、為業、為経、頼業、という三人の息子があったが、全員が出家している。所謂、大原三寂である。時代背景に、それを促す何かがあったと考えられる。

(2)

義清出家の動機のひとつとして大方の強い関心と呼びつづけているのが、身分違いの「いとやんごとなき女性」に失恋したから、という説である。

これの主たる根拠とされているのが、『源平盛衰記』⁴⁾卷第八の中の次のような記述である。

さても西行発心のおこりを尋ぬれば、源は恋ゆゑとぞ承る。申すも恐れある上臆女房を思ひ懸け進ぜたりけるを、阿漕の浦ぞといふ仰せを蒙りて思ひ切り、官位は春の夜見はてぬ夢と思ひなし、榮栄は秋の夜の月西へとなずらへて、有為世の契りを遁れつつ、無為の道にぞ入りにける。阿漕は歌の心なり。

伊勢の海あこぎが浦に引く網も度かさなれば人もこそ知れ
といふ心は、かの阿漕の浦には神の誓ひにて、年に一度の外は網を引かずと

かや。この仰せを承って、西行が詠みける。

思ひきや藤の高根に一夜ねて雲の上なる月を見むとは
この歌の心を思ふには、一夜の御契りはありけるにや。重ねてきこしめすこと
のありければこそ阿漕とは仰せけめ、情なかりけることどもなり。かの貫
之が御前の簀子の辺に候て、まどろむほども夜をやぬるらむといふ一首の御
製を給ひて、夢にやみるとまどろまむぞ君と申したりしことまでも、思ひや
るこそゆかしけれ。

この恋の相手の女性は、待賢門院璋子とされている。この女性は、かつて
義清が家人として仕えた左大臣大徳寺実能の妹で、鳥羽院の中宮である。身
分違いも甚だしく、本来なら、到底義清の手の届く存在ではないのだが、所
謂状況証拠といえそうなものにはこと欠かないようである。然し、男女の間
がどのレベルにまで進んでいたかを第三者が実証するのは至難の業である。
それは、究極のところは、当事者だけにしか判らないことなのだ。

このことを踏まえうえて、次に、その状況証拠らしいものを追ってみる
ことにしよう。

先ず、『源平盛衰記』が、二人の間に少なくとも一度は契りがあったとい
うことを暗示するものとして掲げている「思ひきや」の歌は、西行のどの歌
集にも見当たらないことから、歌そのものが西行らしくないということか
ら、これが西行の作であることを疑う声は多い。学者ばかりではなくて、
辻邦生も、二人の間に一度の契りのあったことを前提として書き、沢山の恋
の歌を引用している『西行花伝』の中でさえ、この歌には全く触れていない。
白洲正子も、義清出家遁世の最大の動機として待賢門院への失恋を据えてい
る『西行』で、この歌は「盛衰記の作者の創作かもしれない」とコメントし
ている。然し、白洲は、その直ぐ後で、西行がやんごとなき女性と契りをむ
すんだことを推察させるものとして、次のような歌を挙げている⁵⁾。

西行の出家と歌

知らざりき雲るのよそに見し月の
かげを袂に宿すべしとは

月のみやうはの空なる形見にて
思ひも出でば心通はん

西行には、周知のとおり、恋の歌が多い。然し、彼は、自分の恋の歌の相手が誰であるかについては一言もほのめかしさえしていない。それに、恋の歌というものが、往々にして、全くの虚構でもあり得る、ということもまた事実であろう。だが、それでもなお、実体験なしに、かくも心情の籠った恋の歌をかくもおびただしく作れるものであろうか、というのが大方の見方である。それに、やはり、西行の行動の軌跡には、待賢門院璋子との間に並でない関係があったことを暗示しないではおかないところがある。

待賢門院璋子には、男と女の関係の面で、特異な背景があった。それは、先ず何よりも、ほかならぬ白河院との不義密通である。彼女は、幼少にして祇園女御の養女となり、白河院のもとで院の溺愛を受けながら育てられた。色白の美人だったようである。白河院は、情事に関して破天荒の行動をとるところがあった。院は、待賢門院を自分の孫（堀河天皇第一皇子）である鳥羽天皇の中宮にしたあとも、彼女を伴って熊野詣に出掛けたりもしている。（白河院は情事となると自制心が機能しない傾向がある。自分の女であった祇園女御を平忠盛に押しつけたのもそうであるし、自分が手を付けた女を真西の妻にさせてもいる。）そして、彼女が産んだ第一子崇徳院は、夫の鳥羽天皇ではなくて、白河院と待賢門院との間の子である、とされている。こんなわけで、鳥羽天皇は、崇徳院のことを自嘲的に叔父子と呼んでいたという。更に、待賢門院は、白河院による特異な溺愛を享受したことが主な原因で、性生活が奔放だったようである。夫以外の何人もの異性との性交渉があったのだ。そういう性情をもった高位の女性が、手の届くところにいた若い魅力的な義清に触手をうごかしたとしても不思議はないだろう。二人の間には一

回り半ほどの年齢差がある。が、青年が相当の年上の女性に母の面影をみて男女の関係になる例は数多ある。義清が出家したのは、23歳のときであり、もし二人の間に関係があったとすれば、それよりも幾らか前のことと考えられるから、待賢門院が40歳頃のことであろう。だとすると、それは、奔放な性行動をしてきた美しい女性が、自己の色香の衰えを自覚し、若さのまぶしさにひとしお心惹かれ、ひそかに最後の華やぎの種を求めるときではないだろうか。そこに、彼女との縁浅からぬ青年武士義清がいたのだ。義清は、鍛えぬかれた体躯の持ち主であり、弓馬の術に勝れ、蹴鞠と和歌の名手である。将に、文字通り、文武両道の達人である。そして、待賢門院が、この青年武士も自分をひそかに慕っているということを察知したとしたら、そこから先の展開にブレーキをかけるのは、至難の業であろう。義清もまた多情の人だったのである。彼の夥しい数の恋の歌には心情がこもっている。

辻邦生の『西行花伝』は、ふたりの一度だけの契りを、流鏑馬の行われた日の夜に設定している。待賢門院は、流鏑馬の競技で抜群の妙技を見せる義清に心を奪われ、その夜、腹心の侍女堀河局に手引きをさせて彼を褥のなかに入れるのである。待賢門院は恋をうち明けて誘うが、義清のほうでも以前から彼女を慕っていたことを明かす。彼は、少年時代に喪った母の面影をも彼女のうえに重ねてもいたのだった。

辻邦生は、10年の歳月をかけて研究文献を渉猟し西行ゆかりの地を訪ね自己の内面の酵母の十分な発酵を待ったうえで、やっと執筆にとりかかり、更に数年をかけてこれを完成させた。そして、作品の後記に、研究文献からの学恩について付記している。然し、やはり、作家という立場であればこそ上記の件は書けるのである。可能なかぎりの手続きを確実に踏んだうえではあるが、ふたりの間に性のまじわりがあった、という前提に立っている。他方、研究者のほうは、その出来にくい立場にある。どうしても、事実の外的証拠の有無に縛られるのだ。

では、研究者たちは、ふたりの性的関係を否定しているのかといえば、決してそうとも言えないようである。例えば、饗庭孝男は『西行』のなかで、

西行の出家と歌

ふたりの間にそういう関係があったとする白洲正子の説に対して、なるほど、いったんは反論してみせている。白洲の見解というのは、待賢門院璋子は義清がかつて家人として仕えたことのある大徳寺家の姫君であったからふたりは近しい間柄であり得たこと、美しい璋子が白河院の手でファミ・テレーブルにさせられていて男と女の関係に於いて奔放であったこと、西行の恋の歌の内容、『源平盛衰記』の記述、などを踏まえて、ふたりの間に一度の契りはあっただろう、とするものである。これに対する饗庭の反論は、璋子が前備後守季通や増賢の童子と通じていたことは史料に残っているのに西行との関係を立証する史料はないということ、璋子は政治の要に居た白河院と生涯にわたって深く結びついていたのだから西行との間に秘事があれば必ず（史料となるような）何らかの反応が出たはずだということ、西行は多くの恋の歌を詠んでいるが一人としてその相手を推定させず私生活を決して語らないという非常に慎重な性格であったこと、などを踏まえて、西行は、心の内はともかく、「申すも恐れある上臆」にそういう行動は取らなかつただろうとするものである⁶⁾。

然し、饗庭は、同じ章の第4項で、西行の「恋百十首」の中から、「うち絶えて君に逢ふ人いかなれやわが身も同じ世にこそは経れ」や「七夕は逢ふをうれしと思ふらんわれは別れの憂き今宵かな」など、「君」と「われ」という語を含んだ歌をそれぞれ数首ずつ引用して、この恋の相手は、やんごとなき年上の女性ではないか、と指摘している。そして、第5項では、西行の出家遁世の動機の一つがこの恋であったことを肯定する。尤も、その恋が現実に実らせたものではなくて、身を切るような断念によって心深くに秘めたものであったればこそそれはあり得たのだろうとしているのだが。つまり、彼は、ふたりの間からだの関係はなかつたが、義清に身分の高い女性への激しい恋があったと考えている。もし、そういうことがあったというのなら、その相手が待賢門院璋子であったという可能性も大いにあるのではないか。そして、ふたりの間に一夜の契りがあったかどうかということについては、肯定する側も否定する側もともに外的確証が無いかぎり確定はできないのだ。

もう少し状況証拠を付け加えるなら、義清は出家して円位西行となったあとも、待賢門院璋子の身边から完全に離れてしまおうとはしなかった、という事実がある。つまり、その後も彼は、彼女の腹心の女房堀河局や兵衛局との交際を続けたのだ。待賢門院が落飾したときも、彼女の寺の近くに彼は移り住んでいる。また、彼女の第一子である崇徳院に対する彼の心遣いには並ならぬものがある。そして、後年に書かれた軍記『源平盛衰記』のあの記述は何を語るのだろうか。史料としてはフィクションをまじえた異本なのでそのまま信じるわけにはいかない。でも、では、そこでは、全く火の気もないのに煙が立ったのであろうか。それは、結論の出ることのない謎であろう。

結局は、待賢門院璋子と西行の間の男と女の関係については、状況証拠を列挙することはできるが、研究者の立場では断言を下すことはできないのだ。ただ、西行の夥しい数の恋の歌の内容は、西行に高貴の女性への激しい恋の経験があったことを証明するものだ、ということは大方の研究者たちも意見の一致するところである。

さて、目崎徳衛も指摘しているように、恋と並んで西行出家遁世の二大動機の一つとされているのが、道心・宗教心である。出家後の行動を見ても、彼がいかに強い道心の持ち主であったかということは疑う余地のないものである。

西行は、出家後も、確かに、既に言及したように、待賢門院璋子の匂う領域から完全に離れてしまうということとはしなかった。京都の現実の動きと断絶することもなかった。彼の歌にも、過去の縁を断ち切れぬ気持ち、人恋しさ、未練、といったものが繰り返し詠われている。然し、同時に、彼は人一倍まじめに熱心に宗教の道の修業に励んでいる。

彼の信仰は、或る特定の宗派に固定されてはいなくて、どちらかといえば、所謂雑宗というものであったようだ。叡山とも高野山とも繋がりをもったばかりでなく、山伏について熊野修験道の修業もしている。のみならず、後に、伊勢系の神道をも学んだ。このような彼の道心をテーマにしているのが、

西行の出家と歌

『西行物語』である。この作品も虚構を含んでいるから、どこまで信頼してよいかは判らないが、これによれば、北面の武士佐藤義清は、25歳にして、己の仏道修業のために妻子を捨てたことになっている。(この25歳というのも、現在の研究者たちの間では一応23歳の時ということになっているから、それとはずれている。)

さて、この『西行物語』の概略は次のようなものである。

鳥羽院の時代に、左兵衛尉藤原義清という北面の武士がいて、文武両道の腕前が群を抜いて優秀であった。院は義清に特別目をかけていて、廷尉にとりたててやろうという考えを持っていた。然し、義清のほうは、それをお受けすることに気持ちがすすまなかった。それは、主に彼の深い道心のゆえであった。

物語は、義清が何彼につけて如何に院を感動させたかということ具体的には語っている。例えば、鳥羽院は、大治2年に鳥羽離宮へ御幸するがそこに新調された障子絵を喜び、当代の歌人たちを召して、この障子絵を題にして作歌することを求められた。そのとき歌人たちが苦吟している中であって、義清だけがその日のうちに詠みあげて、10首を奉ることが出来た。しかも、素晴らしい作品ばかりである。院は、彼に、朝日丸という剣と15枚の装束を賜った。が、義清は、これを生涯の名誉と思う一方で、現世への執着がこれで一層深まるのではないかという不安も抱くのであった。

実際に出家に踏み切れないでいた義清は、或る日、親しく付き合っていた佐藤左右衛門尉憲康の突然死に直面する。ふたりは先祖を同じくしていたのだが、御所からの帰途、憲康は世のはかなさを嘆き出家して山里に住みたいという気持ちを伝えたりした。明朝早くに全員が鳥羽離宮へ参上することになっていたのだが、憲康は、義清に、途中彼の家へ立ち寄ってさそってくれと頼んだ。翌朝、義清が約束どおり憲康の家に寄ってみると門のあたりに大勢の人が集まって騒いでいた。憲康が昨夜就寝中に亡くなったのだった。憲康は、義清より2歳上の27歳であった。義清は馬に鞭を当てて鳥羽殿へと急いだ。彼は、そこで、鳥羽院に、出家の暇を願い出たのだった。そして、夕

方、彼は、この度の出家に障りあらせたもうな、と祈りながら帰宅した。すると、4歳になる娘が縁側へ走り出てきた。義清は、煩惱の絆を断ち切るために心を鬼にして、娘を縁の下へ蹴落とす。その件の原文は次のようになっている。

秋は又のがれて、このくれに出家さはりなくとげさせ給へと三宝にきせい申て、宿へかゑりゆく程に、としごろさがたくいとうしがりける女子、生年四歳になるが、ゑんに出むかひて、ちゝ御ぜんのきたれるがうれしといゝて、袖にとりつきたるを、いとをしさたぐひなく、めもくれておぼえけれども、これこそぼんなうのきづなよとおもひとり、ゑんよりしもへけおとしたりければ、なきかなしみたることもみゝにもきゝいれずして、うちいりて、今夜ばかりのかりのやどぞかしと思ふに、涙にむぜびてぞあはれにおぼえける。女房は男には猶まさりける人にて、かねてよりおとこの出家せんずることをさとりて、このむすめのなきかなしむを見ても、おどろくけしきのなかりけるこそあはれに見えけれ⁷⁾。

社会的地位をも妻子をも捨てて出家を果たした西行は、仏道修行に励み、最終的には、自作の歌「ねがはくははなのもとにて春しなむそのきさらぎのもち月のころ」の願いどおり、建久元年(1190)2月16日、釈迦寂滅と同じ日に寂した。享年73歳であった。花の下、「西方にむかひて歡喜のゑみをふくみて」次の一首を遺したという。「仏にはさくらの花をたてまつれ 我後の世を人とぶらはゞ」

『西行物語』には、西行が、並々ならぬ仏道修行の結果、如何に素晴らしい大往生を遂げることが出来たかが語られている。紫雲が降りてきて卅五の菩薩が姿を現わす。「観音はれんだいをさゝげておはしませば、すなはち乗てつるにおうじやうをとげつ。むかし、しゃくそん鶴林の夕辺にことならずして、二月の十五日におはりぬ。」⁸⁾

『西行物語』は、年齢のずれなども含めて必ずしも外的事実即している

西行の出家と歌

いところがあるが、西行の生き方の思想的本質をかなりよく伝え得ているのではあるまいか。仏道修業を称揚する意図がうかがわれはするのだが。

西行は、仏教の顕密両教を修業しているが、それにとどまらず山岳信仰による山伏の修業をも、本地垂迹思想に基づく神道の勉強をも経験している。山伏の修業は、最も厳しいとされる大峰山のそれであり、熊野山伏宗南坊行宗の指導を受けている。この修業に於いて、宗南坊行宗が特に西行にきびしく辛く当たるので文句をいうと、「苦行こそ地獄・餓鬼・畜生の三悪道の苦しみを体験して極楽浄土への道を知るのだ」⁹⁾と諭されて、彼は、それを有り難くおもい、難行苦行の修業を最後までやり遂げた、という説話も残っている。

西行は、出家した後も数年は都の周辺に住んでいた。それは、大原や嵯峨野や鞍馬であり、なかなか過去を捨て切れなかったことが窺える。が、やがて、彼は、奥吉野、高野山、讃岐、伊勢二見浦、などに庵をむすんだ。わけでも、高野山では30年という長い歳月を過ごしている。高野山にしる、奥吉野にしる、山中に庵をむすんで独りそこで生活するということには、並々ならぬ厳しさがあつたはずである。

よく西行の出家遁世ということがいわれるけれども、彼は決して現世と断絶したわけではなかった。彼は、出家後も、特に自分と縁のあつた人たちの救済や鎮魂のために奔走している。例えば、鳥羽院の崩御に際しては、とるものもとりあえず駆けつけて、夜を徹して読経している。また、保元の乱の結果四国の讃岐へ島流しされた崇徳院のために、恨みによって自らの身を滅ぼし地獄に堕ちることがないように、といかにも仏道の修行者らしい進言をしている。尤も、院はそれを聞き入れてはくれなかったのだが。そして、西行は、怨恨と瞋恚のうちに亡くなり地獄に迷っているに違いない院の靈魂を救済するために四国に渡っている。(善通寺に草庵をむすんだのもこのときである。)

彼が、重源に依頼されて、東大寺再建のための勸進を成し遂げるべく、陸奥は平泉へ旅立ったのは、既に、69歳のときであった。

西行は、仏道の修業者であったばかりでなく、その実践者でもあったのである。彼には、終始、現実の問題と積極的に取り組もうとする姿勢があった。例えば、鳥羽院の怒りにふれて罰せられることになって彼のところに泣きついてきた者のために、鳥羽院にとりなして赦してもらってあげたり、必要に応じて元同僚の平清盛に助力を頼んだり、彼は、実にきびきびと行動している。出家遁世といっても、特に彼の場合は、現実から逃避して自分だけの世界に籠もってしまうというようなものでは、断じてなかった。待賢門院が落飾したあとは、彼女の寺の近くに住み、彼女への格別の気遣いをみせている。彼女の腹心であった堀河女房や兵衛局女房などとの親しい交際をつけている。彼は、生涯にわたって、内に籠もってしまうのではなくて、或る意味での救済ということをも含めて、しきりに外へ働きかけるという行動を繰り返している。なかなかの実践家である。

ところで、恋と道心ということの他にもう一つ忘れてはならないのが、彼の数寄への思いである。つまり、彼の出家の動機は、風流三昧に人生を楽しむ為でもあったとするものである。その風流というのは、彼の場合、和歌を作ることであった。王朝貴族社会の末期で閉塞感の漂うこの時代には、このような目的で出家する者が結構多かったのだ。彼もその一人だというのである。

目崎徳衛は、数寄の遁世者が輩出した理由として次の2点を指摘している。「第一は、貴族社会における身分・家柄の固定・硬化がもたらした不満と絶望である。」「第二は貴族層の得た経済的余裕である。」¹⁰⁾

この二つの条件は百パーセント西行に当てはまる。のみならず、彼の場合は、生まれながらにして数寄に傾く性向をもっていた。つまり、既に言及したとおり、彼の母方の祖父は数寄の道で名を残したほどの粹人であり、そのDNAを西行が受け継いでいたと考えられる。彼の蹴鞠と和歌における抜群の才能はその現れであろう。そして、社会的身分の桎梏に縛られることなく、恵まれた経済力で生活を支えられながら、数寄に遊んで日々を過ごすという暮らしは、確かに人を誘惑する力があるにちがいない。これで、西行の

西行の出家と歌

出家遁世の動機とされているものは、いちおう、すべて出揃ったことになる。けれども、私は、茲に、もう一つだけ付け加えておきたい。それは、端的に言って、西行自らによる所謂「生き甲斐」の発見ということである。この現象に関しては表現の仕方は色々あるだろう。例えば、アイデンティティの発見とか本当の自分自身との出逢いとかも。このことの内容について、神谷美恵子は次のように指摘している。

生きがいを感じる心にはいろいろな要素がまざりあっている。これをもしざっと感情的なものと理性的なもののふたつに分けるならば、生きがい感の形成にはどちらが重要であろうか。

りっぱな社会的地位につき円満な家庭を持っているひとが、理くつの上では自分の存在意義を大いにみとめながら、心の深いところでは生きがいを感じられなくて悩むことがある。パスカルのいうとおりの心情には理性とはまたべつな道理があるからである。

なんといっても生きがいについていちばん正直なものは感情であろう。もし心のなかにすべてを圧倒するような、強い、いきいきとしたよろこびが「腹の底から」、すなわち存在の根底から湧きあがったとしたら、これこそ生きがい感の最もそぼくな形のものとかんがえてよかろう。このよろこびは時には思いがけない場合にほとぼしり出て、本人をおどろかせることがある。自分の求める生きがいは何かということが、これによって初めて本人にはっきりすることもある。理くつは大ていあとからつくようで、先に理くつが立っても感情はかならずしもそれについて行かない。ゆえにあるひとに真のよろこびをもたらすものこそ、そのひとの生きがいとなりうるものであるといえる¹¹⁾。

西行の出家遁世後の行動の仕方や和歌作品の質からいっても、動機のなかに上記の要素を考えないわけにはいかないのである。

確かに、西行は、無常とさみしさの歌を数多く詠じつづけた。普通なら、

常識的には、それはマイナスイメージのものかもしれない。にも拘わらず、そういうものを詠じた彼の歌は、意外に、澄んだ明るさがあり、どこか浮き浮きしている。まるで、楽しくてしようがない、という風に。万が一、それが世にいう不幸のひとつであり得たとしても、心からそれを楽しんででもいるような。

風になびく富士の煙の空に消えてゆへも知らぬわが思ひかな¹²⁾

この歌には、『新古今和歌集』では、「東の方へ修業し侍りけるに、富士の山をよめる」という前書が付いていて、「雑歌」の部に入っている。他方、『西行法師家集』では前書はなくて、「恋」の部に入っている¹³⁾。

風になびく富士の煙が空に消えていくが、ちょうどあのようにならないうようになっていくかも知れない、わたしの思いの火であることよ。

慈円は、西行がこの作を第一の自讃歌としたと伝えている。魂の永遠の漂泊性をとらえて幽玄¹⁴⁾。

さて、作者の西行が慈円に、「これぞわが第一の自讃歌」といったというこの歌は、どうであろうか。

これは、西行が寂する2、3年前の作とも慈円はいつており、奥州への二度目の旅の途中に詠まれたものと考えられている。この旅は、東大寺再建のための沙金の勧進を藤原秀衡に願い出る目的のものであり、西行はその時もう69歳になっていた。（「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」もこの旅での作。）

「ゆくへも知らぬ」が「煙」と「わが思ひ」の両方にかかっているということはいまでもあるまい。

上記の解釈は、この「思ひ」について、＜思いという火。「思ひ」の「ひ」に「火」をかけて、「煙」の縁語。＞という注を付けている。これは確かに尤

西行の出家と歌

もらしく、理屈の上では正しいのかもしれない。しかし、私は、この解釈は、かえって、この作品を底の見え透いたものにしてしまうとおもうのだが、どうであろうか。つまり、「思ひ」の「ひ」が煙の縁語の「火」で、煙が空に消えると一緒に消えてしまうというのであれば、「火」が消失していくという視覚的イメージの限定性からいっても、西行自身が「わが第一の自讃歌」としたにしては、この歌は、あまりにも底の割れた浅いものになりはしないか。

ここはむしろ、文字どおり、「思ひ」という無形の広がりをもち得る言葉のままがよい。それは、空に「ゆくへも知れず」無限定的に広がっていつてくれる。そして、何ものにも制約されることなく空に消えひろがってゆく「わが思ひ」を、作者は、悲しんでばかりいるのではなくて、楽しんでもいるのである。肯定的に捉えている。

これは、やはり、西行に、仏の恩寵と加護に身をゆだねているという姿勢があるからであろう。明るく澄んでいる。無常をうたいながら、どこか浮き浮きとしていて、幸福感が伝わってくる。西行が、何故、自分の歌を真言だといったかも理解できてくる。

願はくは花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月の頃

仏には桜の花をたてまつれわが後の世を人とぶらはば¹⁵⁾

西行は、このように自分の死について歌を詠むときも、じつに明るく楽しげである。しかも、その願いどおり、釈迦入滅と同じ日の2月16日に河内の弘川寺で寂している。のみならず、もう一つの願いも充分にかなえられている。つまり、仏と成った西行に花をたてまつる崇拜者は跡を絶たないのだ。

彼の死後15年を経て完成された『新古今集』には、西行の歌94首が選ばれている。これは、破格の入集率である。

「西行はおもしろくてしかもこころも殊にふかくあはれなる、ありがたく、

出来がたきかたもともに相兼てみゆ。生得の歌人とおぼゆ。これによりて、おぼろげの人のまねびなどすべき歌にあらず。不可説の上手なり。」(後鳥羽院御口伝)と後鳥羽院も賞賛している。(尤も、これに対しては、定家を批判するためのものであってその点を差し引いて受け取るべきだ、という目崎徳衛の指摘があるのだが。)¹⁶⁾

ときには、そのアマチュアっぽさが指摘されることもあるのだが、西行の歌は、やはり、魅力に満ちており、彼の作歌活動は、仏への深い帰依と表裏一体をなしていたといえよう。

彼の歌の多くは、いかにも、仏の慈悲と恩寵の光に包まれている。

西行が明恵上人に語ったとされている言葉を茲に引用して、この稿の結びとしたい。

西行法師常に来りて物語りして云わく、我が歌を読むは、遙に尋常に異なり、華・郭公・月・雪都て万物の興に向ひても、凡そ所有相皆是れ虚妄なること眼に遮り耳に満てり。又読み出す所の言句は皆是れ真言にあらずや、華を読むとも実に華と思ふことなく、月を詠ずれども実に月とも思はず、只此の如くして、縁に随ひ興に随ひ読み置く処なり。紅虹たなびけば虚空いろどれるに似たり。白日かゞやけば虚空明かなるに似たり。然れども虚空は本明かなるものにもあらず、又色どれるにもあらず。我又此の虚空の如くなる心の上において、種々の風情をいろどると雖も更に蹤跡なし。此の歌即ち是れ如来の真の形体なり。されば一首読み出でては一体の仏像を造る思ひをなし、一句を思ひ続けては秘密の真言を唱ふるに同じ、我れ此の歌によりて法を得ることあり。

(喜海「高山寺明恵上人行状」)

西行の出家と歌

注

1) 『台記』(左大臣藤原頼長の日記)

西行について、「重代の勇士たるを以て、法皇(鳥羽院)に仕ふ。俗時より心を仏道に入る。家富み、年若く、心に愁なきに、遂に以て遁世す。人これを嘆美する也。」とある。

2) 目崎徳衛『西行』(吉川弘文堂, 東京, 1980) 17-19。

3) 『山家集』(新潮社, 東京, 1982) 216。

この書の注釈: たまたま御葬送にめぐりあえた今宵こそ, 本当に思い知られたことである。亡き一院には前世からの浅からぬ縁のあるわが身であったのだ。係り結びによる二句切れ, 第五句の「なりけり」の詠嘆に, 西行の深い感動のほどが知られる。

4) 軍記物語で, 平家物語の一異本。14世紀頃に成立したと考えられているが, 編者未詳。

5) 白洲正子『西行』(新潮社, 東京, 1988) 36。

6) 饗庭孝男『西行』(小沢書店, 東京, 1933) 164-165。

7) 「西行物語」(文明本上), 久保田淳編『西行全集』(日本古典文学会, 東京, 1996) 966。

8) Ibid. (文明本下), 995。

9) 目崎徳衛, op.ct., 113。

10) Ibid., 69。

11) 神谷美恵子『生きがいについて』(みすず書房, 東京, 1980) 18-19。

12) 『新古今和歌集』(小学館, 東京, 1974) 484。

13) 『西行全集』, op.ct., 381。

14) 『新古今和歌集』, op.ct., 484。

15) 『山家集』, op.ct., 29。

16) 目崎徳衛『数寄と無常』(吉川弘文館, 東京, 1988) 74-75。

Waka of Saigyō as a Hermit

Hiroaki DEHARA

Quite a few motives for Saigyō's renouncing the world have been pointed out. For instance, his lost love for Taikenmoninshoshi is one of them. It is said that she accepted him as a lover only once and refused him ever after. However, it is very difficult to verify that he had an affair with her, though there is a lot of circumstantial evidence.

It is also said that the sudden death of one of his cousins brought home to him the ephemerality of life.

During the age he lived in, historic events as well as natural disasters took place one after another that shook the very foundations of society. This must have made him all the more pessimistic.

He was inclined toward Buddhism. When he was 23 years old, he, elite soldier, turned bonze, renouncing the world.

Then, he devoted himself to hard disciplines not only of Buddhism (including *Shugendo*) but also of *Shinto*.

Most of his *waka* are very beautiful, poetic, and moving. He is a genius. He is one of the most popular national poets. As many as ninety-four of his *waka* won acceptance into *Kokinwakashū*. He ranked with the best as a poet.

He loved cherry blossoms and the moon dearly. One of his *waka* is as follows:

I wish to die under cherry blossoms at the time of the full moon of February (of the lunar calendar).

He died on the 16th of February (of the lunar calendar) 1190, exactly

西行の出家と歌

the date on which he had wished to die. It is the same date as that of Buddha's obit.